

---

# 帝都防空禄 月夜の邂逅

流水郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝都防空禄 月夜の邂逅

### 【Nコード】

N4136F

### 【作者名】

流水郎

### 【あらすじ】

ある想いを胸に秘め、帝都に向かうB-29。それに挑む、夜間戦闘機『月光』。航空機に宿った“艦魂”2人が、月明かりの下で対峙する……。 “艦魂”といっても、最初なので得意分野(?)である航空機の話にしました。なので正確には艦魂とは呼べないですが(汗)

.....前編.....  
.....(前書き).....

……前編……

紅く燃える街を見下ろしつつ、巨大な鉄の塊が飛んでいく。

B-29『スーパードフォートレス』。

排気タービンエンジン4基を搭載する『超空の要塞』。

その中の1機の機首に、花束を抱えた少女の絵が描かれていた。

「……今日も、よく燃えてやがる」

操縦士が呟いた。

「あの中にいるのは、女子供ばかりなんだろうな」

「ジャック、あまり考えるな」

機長のレイモンド「ウェイン大尉が言う。

半分は、自分に言い聞かせているようだった。

「お前がそんなことを言っていては、マリーに悪いだろう」

ウェイン大尉は、傍らにいる1人の少女に目をやった。

栗色の髪に金色の瞳、レモン色のワンピースを着ていて、機首に描かれた少女と、どこことなく似ている気がする。

しかし手に持っているのは花束ではなく、一振りのサーベルだった。

「いえ、機長……私は別に……」

何処か悲しげな笑みを浮かべ、マリーと呼ばれたその少女は言う。

……この可憐な少女が、超空の要塞B-29そのものであるなどと、

誰が信じるだろうか。

「なあ、マリー」

操縦士・ジャック・クレイズ中尉は話しかける。

「お前、この戦争に正義はあると思うか？」

「……わかりません」

マリーは素っ気なく答えた。

「でも私は、例え自分が正義ではなくても、戦います。それが私の使命だから」

それを聞いて、操縦桿を握るジャックは舌打ちする。  
そして、歯ぎしりしつづけた。

「可愛い顔してても、所詮は兵器か！」

「止せ、ジャック！」

ウェイン大尉が怒鳴った。

「言っていいことと悪いことの区別くらい、つかないのか！」

「いいんです、機長……ジャックさんを叱らないで……」

マリーが止めに入る。

ジャックはフンと鼻を鳴らすと、再び操縦だけに集中した。

「私は兵器……でも……」

呟くように、マリーは言う。

「……この戦いに勝って……私は自由になります……！」

… … …

明朝

日本海軍 厚木飛行場

「昨夜の爆撃は、また凄かったな」

「ああ、大勢死んだやろうね」

二人の兵士が、双発戦闘機の前で談話している。  
夜間戦闘機『月光』。

元々は陸上攻撃機を護衛する、遠距離戦闘機として作られたが、双発故に運動性が低く、敵戦闘機に対抗するのは不可能と判断され、二式陸上偵察機として活躍することとなった。

だがより高速の偵察機が求められるようになり、ほとんど存在意義を失ったこの機体は、『斜め銃』が発案されたことにより、対爆撃機用の夜間戦闘機『月光』として生まれ変わることとなったのだ。

「大本営じゃ、まだ皇軍は快進撃を続けてるって大嘘を流してやが

る」

「ああ。空襲で死んだ連中は、俺等を怨どるやろう」

「ふう……消えるは電気、電気は光る、光るは親父のハゲ頭……」

荻堂が意味もなくばやくと、月光の後部座席から、何かがひょっこりと顔を出した。

端正な顔立ちの少女だ。

武士のような羽織りに袴を履き、腰には日本刀を差している。

それよりも彼女は、月明かりのような不思議な『気』を放っていた。

「なんだ小夜、まだ起きてたのか」

「うん、なんか眠くなくて」

小夜はてへへ、と笑う。

「夜間戦闘機なんだから、朝はゆっくり寝てろよ」

「でも、他の『月光』は寝ないよ」

「そりゃ、お前は特別な戦闘機だからな」

「そうそう、“艦魂”を宿しとるんやから」

……“艦魂”。

その名の通り、艦船に宿ると言われる魂だ。

それぞれ違いはあるが、多くは美しい女性の姿をしていて、特定の人間にしか見えないという。

艦船は、多くの職人の手で造られる物であり、彼らの想いと誇りが、物言わぬ兵器に魂を宿すのだろう。

航空機に宿る“艦魂”は極めて珍しく、この『月光』……小夜には、何か特別な想いが込められているのかも知れない。

操縦士の荻堂上飛曹と、後部座席搭乗員の五十嵐上飛曹は、ラパウル時代から月光に乗るベテランの搭乗員だ。

日本軍は、パイロットに割り当てる機体を特定していない（機種は大抵固定される）。

だがこの2人は例外的に、小夜の宿る機体のみに乗っている。

理由は、この機体は荻堂と五十嵐以外の者では、「何故か」まともに操縦できないのである。

……無論、小夜との相性の問題だろう。

「ねえねえ、他の操縦士さんたちが話してるのを聞いたんだけど、絶対に墜ちないB-29がいるんだって？」

小夜が後部座席から降りた。

飛び降りる、というよりも、舞い降りると言うべき、優雅な動作だった。

「ああ、そのB公を狙った戦闘機は、近づくことすらできずに墜とされるって、噂になってる」

「機首に、花束抱えた女の絵が描いてある機うちゅう話や。他のB公と何か違うんかね？」

「どうもおかしいんだよな。熟練の搭乗員が、プロペラの後流に飛ばされたりとかさ……」



すると小夜は少し考えた後、こう言った。

「今度、そのB - 29を探してみたいの」

「えっ ?」

「そのB - 29を墜とせば、みんな少しは安心して戦えると思うの。だから……」

「ふうむ……」

荻堂は腕を組んだ。

「どうするんや、荻堂 ?」

と、五十嵐。

「……いいんじゃないか、俺等の手で墜としてやろう。こっちは小夜がついてるんだからな」

「ほな、決まりやね。頼むで、小夜」

「うん ! 任せて !」

……日本軍に未来は無い。

荻堂も五十嵐も、わかっていた。

アメリカの工業力は圧倒的だ。

B - 29のような巨人機を量産し、惜しげもなく投入してくるのだ。日本軍は迎撃戦闘機として、異形のエンテ型戦闘機『震電』、ロケ

ツト戦闘機『秋水』などを開発しているが、実用化には程遠い。  
しかし、何もできないからと言って、何もしない訳にはいかない。  
日本人の意地、そして戦闘機乗りの意地だ。  
彼らの愛機に宿る少女……小夜も、命の限り彼らを支えたと、誓っていた。

……そして、3日後の夜。

B-29の編隊が、帝都に向かう。  
その中に、『マリー』号の姿もあった。

「……そろそろ、ジャップの戦闘機が来るころだ」

ウェイン大尉が言った。  
傍らに、マリーの姿がある。

「用心しろ、連中は死を恐れていない」

「チッ……そりゃ国を守るために、必死でしょうからなア」

ジャックが忌々しげに言う。  
副操縦士はジャックの口調に恐怖を覚えたのか、そつぽを向いて無視を決め込んでいる。

「……ジャックさん」

マリーが口を開いた。

「……何だ？」

「貴方は、何がそんなに……不満なのですか？」

その言葉が、ジャックに火を着けた。

「何が不満かって！？　わからねえなら教えてやるよ、ポンコツ爆撃機！」

「おい、ジャック！」

ウェイン大尉がたしなめるが、ジャックは無視して続ける。

「小さいころな、どうしようもないクソガキの俺は、周りの不良と一緒に下町を暴れ回った。イエス様に唾吐きかけた分だけ偉くなれるって、本機で信じていたんだよ」

「……」

「そしてある日、とうとう人を殺しかけた。母ちゃんは俺の頬を打って、命は尊いものだ教えてくれた。そこで俺はようやく気づいたんだよ、自分がどれだけちっぽけで、どれだけ弱いかってことを！」

「ち、中尉、お願いですから落ち着いて操縦を……」

航法担当が、ジャックの剣幕に怯えながら言う。

「本当に強くなりてえと思って、俺は軍に入った！　命がけで戦

う空の戦士に憧れて、必死で飛行機の操縦を学んだ！　だが今や  
っていることは何だ！？　俺は母ちゃんが尊いものだと言った  
命を、何百も奪っている！　無抵抗の女子供の命を！　そして  
勲章までもらって英雄扱いだぜ！？　ふざけた話だよ、街中で  
1人殺せば犯罪者になるってのに！」

そこまで言って、ジャックは黙った。  
肩で荒く息をする。

「……ジャックさん、私は……！」

マリーが口を開く。  
だがその時、乗組員の1人が叫んだ。

「来ました！　下方にジャップの戦闘機！」

「機種は！？」

「月光！」  
アーヴィン

夜空の中、1機の双発戦闘機が近づいてくる。

B-29の下部に潜り込む気だ。

「撃て！　撃ち墜とせ！　ジャック、加速だ！」

「了解、っと！」

その時、マリーの表情が変わった。

側面の窓から、接近してくる月光を見る。

「どうした、マリー？」

「……あの戦闘機……」

マリーの体が、小刻みに震え始めた。

「私と同じ……」  
スピリット・オブ・アームズ  
“兵器の精霊”がいる……！

「なんだって！？」

「マリーの他に、飛行機に宿っている奴がいたのか！？」

機内がざわつく。

マリーは数秒間、何かを考えていたが、意を決したかのようにウエイン大尉に言った。

「……機長、お願いします！あの戦闘機と、話をさせてください！」

「なんだと！？」

「相手も同じ“兵器の精霊”なら、私が説得すれば……引き下がってくれるかもしれません！」

そんなことは有り得ないと、マリーは分かっていた。だが生まれて初めて、自分と同じ存在に出会ったのだ。会って話がしたかったのである。

「……いいだろう、行ってきなさい。その間は、一切攻撃をしない」

ウェイン大尉は優しく言った。

「ありがとうございます！」

お礼を言った後、マリーはジャックの方を向いた。

「ジャックさん……私も、貴方と同じ考えです」

マリーは機の壁をすり抜けて、外へ出る。

窓から、彼女が主翼の上に立っているのが見えた。  
その後口を開いたのは、ジャックだった。

「機長、真に勝手ながら、スピードを少し落とさせていただきます」

「何？ ということだ？」

ウェイン大尉が訝しげに問う。

「……その方が、話しやすいでしょう」

「……そうだな」

ウェイン大尉は微かに笑った。

……荻堂は月光の操縦桿を握り、夜空を駆けていた。  
五十嵐が後部座席で、周囲を見回す。

「いたで荻はん！ 二時方向に敵編隊！」

「よし、旋回する！ 小夜、行くぞ！」

《うん！》

この時期、大部分の月光には機上レーダーも搭載されていた。しかしあまりにも性能が悪いのと、レーダーの取り扱いに詳しい整備員がいなかったため、五十嵐が取り外してしまったのである。だが彼らには、レーダーなど不要だ。

機体と同化している小夜が、荻堂と五十嵐を導くのである。

《いた、左20度方向に例のB-29！ 女の子の絵が描いてある奴！》

「あそこか！ いつも通り下部に潜り込んで、斜め銃を喰らわせるぞ！」

月光の『斜め銃』は、その名の通り20mm機銃を30度前後の仰角で装備したものだ。

発案者は現在の厚木の第三〇二航空隊司令官、小園安名大佐だ。

「敵さんも撃ってきたで！」

「ああ！ 20mm弾が確実に命中する距離まで、接近する！」

荻堂の見事な操縦により、B-29からの射撃はなかなか命中しない。

その時、突如小夜が叫んだ。

《あのB - 29、“艦魂”がいる！》

「何！？」

《気配を感じるの！ 私と同じ、“艦魂”の気配がするの！》

それを聞いて、荻堂は合点がいった。

“艦魂”が宿っているのなら、「墜ちない」という噂も頷ける。

自分たちも小夜のおかげで、何度も危ない橋を渡って来れたのだ。

「アメリカさんの“艦魂”も……やっぱり女なんやろか？」

「……そうなんじゃないか？ 機首に女の絵を描くぐらいだから……」

荻堂は躊躇した。

アメリカ軍の“艦魂”も、国のために、仲間のために戦う健気な少女なのだろう。

自分はそれを撃てるのか……？

「！ 荻はん、あれ！」

五十嵐が叫んだ。

見ると、B - 29の主翼の上に、1人の少女が立っているのが見えた。

闇の中だというのに、何故か顔がはっきりと見える。

「“艦魂”……！」

いつの間にか、B - 29からの防御射撃が止んでいた。



速度も、少し落ちている。

《荻堂さん、五十嵐さん！あの“艦魂”、私を呼んでる！  
会って話をしたいって！》

「小夜……」

《お願い、行かせて！》

戸惑う荻堂に、後部座席の五十嵐はそつと言った。

「荻はん……わたらの姫様を、信じましょ」

「……………そうだな。行つてこい、小夜！」

《うん！ありがとう！》

月光の機体から、小夜の姿がすーっと浮かび上がった。  
そして、B-29の主翼に立つ、マリーの元へと飛んだ。

…

……後編……

……闇夜の中、2人の少女が向かい合う。

1人は日本を焼き払うために生まれ、もう1人はそれを阻止するために生まれた。

しかし2人は、互いに敵味方を超えた、何か強い親近感を持っていた。

「……はじめまして」

先に口を開いたのは、マリーの方だった。

「アメリカ空軍戦略爆撃機B - 29……マリーと呼ばれています」

「……私は小夜。日本海軍夜間戦闘機『月光』の“艦魂”……」

彼女らの会話は人間の言葉ではなく、所謂テレパシーのようなもので行われている。

それ故、言葉の壁は無い。

「初めてです。私以外で、航空機に宿るスピリットに出会ったのは」

「私も。でも、嬉しくない。とても悲しい」

「そうですね……私は星条旗、貴女は旭日旗の下にいますから」

マリーが哀しげな笑みを浮かべる。

「サヨさん、貴女には……欲しいものがありますか？」

「欲しい……もの？」

それは小夜にとって、考えたことすら無い言葉だった。  
空を飛び、戦い、搭乗員を守ることだけを考えてきたのだ。

「私は、自由が欲しい」

「自由……？」

「私の機体を作った人が、言ったのです」

マリーは握っていたサーベルを、鞘から引き抜く。

白刃が、月明かりを反射して煌めいた。

「自分は真珠湾で、兄を殺された。だから必ず、日本を灰にしてくれと。そして戦いに勝てば、私は自由になれると……」

サーベルの鞘を空中に放り捨てると、それは如何なる物質でできていたのか、塵となって闇に消えた。

サーベルを小夜に向けて構え、対峙する。

「……もうすぐ、爆撃のコースに入ります。退かないと言っなら、それまでに貴女を墜とさなくてはならない」

「……」

「無駄だとは思っけど、言います。退いてください」

小夜はその言葉に、行動で応えた。  
腰の日本刀に手を添え、抜刀の構えを取る。

「……わかりました」

マリーは少しの間目を閉ざすと、夜空に跳躍……否、飛翔した。  
小夜目がけて、袈裟懸けにサーベルを振り下ろす。

「たあっ！」

小夜は抜き付けの一刀で、マリーの斬撃を受け流し、返す太刀でマリーの首筋を狙う。

抜刀術（居合い）は技を出した後の隙が大きい、などによく言われるが、それは誤りだ。

実際には敵を倒すまで、一瞬たりとも動きを止めないことが多いのである。

マリーが身を反らせて刃をかわすと、刺突を繰り出す。

小夜はそれを紙一重で避け、体を回転させマリーの横に回り込んだ。  
そして2人の刃が正面からぶつかり、鏝迫り合いが始まる。

一方、B-29は速度を上げ、月光本体への防御射撃も再開していた。  
た。

荻堂も下腹に潜り込み、更に接近を続けていた。

「ちっ、アメ公は贅沢に弾ばら撒くよな！」

「ホンマやね！」

死の恐怖が、襲ってくる。

戦闘機乗りの背には、常に死神が張り付いているのだ。

それでも荻堂は、接近を止めない。

「俺たちの誇り、俺たちの意地……見せてやらあ！」

…… B - 29 内部では、機関銃手が必死に迎撃していた。  
ジャックが機を加速させ、月光を振り切ろうとする。

「奴らの狙いは、爆弾倉内の燃料タンクだ！ ジャック、もっと加速しろ！」

「やってます！ しかし後1分足らずで、爆撃コースに入っちゃいますぜ！」

「くそ、早く墜とせ！ 爆弾倉を開けられないぞ！」

その時ジャックは、空中で日本軍の“兵器の精霊”と戦う、マリーの姿を見た。

そして機関銃手に言う。

「軍曹、月光じゃなくて、相手のスピリットを狙えないか！？」  
マリーに機関銃の前まで誘導させる！」

「スピリットに機関銃って効くんですか！？」

「撃ってみなきゃ分からないだろ！」

だが、ウェイン大尉が言った。

「駄目だ！ 彼女たちの戦いに、水を差してはならない」

「けど機長　！」

「ジャック、お前だって知っていたはずだ。マリーがどんな思いで飛んでいたかを」

その言葉を聞き、ジャックは何も言えなくなった。

「……クソッ」

小夜とマリーの戦いは、熾烈を極めていた。

剣はいくらか刃こぼれし、小夜の右頬、マリーの左肩にも、微かに血が滲んでいる。

それでも2人は夜空を舞い、刃を交える。

「はあっ　！」

「せいっ　！」

マリーの一撃を、小夜が刀の峰で受け止める。

小夜は後方に飛び退きつつ納刀し、再び抜刀の体勢を取る。

が、しかし。

B-29の機銃が、月光に命中した。  
風防が音を立てて割れる。

「　！」

小夜がそれに気を取られた瞬間、マリーは体ごと小夜にぶつかった。

そしてそのまま、B - 29の胴体に小夜を押しつける。

「終わりです……私は、自由になるッ！」

小夜の胸目がけて、マリーが刺突を繰り出した。

……キイイン……

刹那、澄んだ音がした。

折れた刀身が回転しながら、光輪のように宙を舞う。

「……！」

マリーは信じられないといった面持ちで、刀身の中程から真つ二つに折られたサーベルを見た。

目の前には、ひびの入った日本刀を握る、小夜の姿があった。

「自由……素晴らしいことだと思うよ。軍とか国とかに縛られないで、自由に空を飛べたら、どんなにいいだろう……でも私は……！」

小夜は刀を両手で持ち、正眼の構を取る。

「……私に乗る人たちや……地上にいる人たちのために……負けるわけにはいかないの！」

……神速、という言葉が似合うであろう。

小夜の刀はマリーの右肩から左脇までを、袈裟に切り裂いた。

真つ赤な鮮血が噴き出す。

マリーは子供のような、きょとんとした表情で、小夜の顔を見つめていた。

それとほぼ同時に、爆発音がした。

荻堂が爆弾倉に接近し、斜め銃を一気に撃ち込んだのである。

マリーの本体であるB - 29は機体中程から炎上し、小夜の本体である月光はその脇をすり抜けていった。

「……ごめん。本当は……」

「……いいんです、サヨさん」

マリーは言った。

彼女の輪郭線が、次第にぼやけ始める。

「今まで罪無き人を、一方的に殺すだけだった私と……貴女は一對一で戦ってくれました。だから本当に……ありがとう」

「……ありがとうって……おかしいよ、そんなの……。私が……！」

涙を流す小夜に、マリーは首を横に振った。

「……さあ、貴女の操縦士達が心配しています。もう別れましょう。こういうとき、日本では何と言うのですか？」

「……さよなら三角、また来て四角」

荻堂が暇なときに口ずさむ遊び歌の、出だしの部分だった。

マリーはそれを聞いてニコリと笑うと、墜ちていく自分の本体へと



戻っていった。

……小夜は涙を無理矢理せき止め、荻堂、五十嵐の元へ向かった。

……… B - 29 の機内。

ジャックはまだ、操縦桿を握っていた。

「……わかっていたさ。街を焼き払う度に、お前が誰よりも悲しんでいたってな」

ジャックは自嘲的な笑みを浮かべる。

「結局俺は、クソガキ止まりだったわけだ」

「ジャックさん……」

彼の傍らで、マリーが口を開いた。

「脱出してください、まだ間に合います」

「俺は星条旗の下で人を殺した。星の印のついた飛行機に乗って死ぬのが、筋つてもんだ」

ジャックはきつぱりと言う。

「……すまねえ、お前を自由には、してやれなかった」

「いいえ……」

マリーは首を横に振った。

「私は幸せでしたよ。……機長、それに他のみんなも、私を仲間と呼んでくれました。それに、口は悪いけど、とても優しい人に操縦してもらえたから……」

「……フン」

ジャックは笑って、空を見上げた。

「俺も……自由になれたのかな。どうか行きたい気分だ」

「……どこへ行きましょうか？」

………

荻堂と五十嵐、そして小夜のしている目の前で、墜ちていくB-29が、突然急上昇し始めた。

そして天を突くような姿で、爆発。  
夜空に散華した。

「………」

荻堂たちは口をきけず、小夜も口をきかず、しばらく無言で飛んでいた。

厚木の飛行場に近づいてきたとき、

「なあ」

「あの」

《ねえ》

三人が同時に、何かを言いかけた。

「あー、……小夜、先に言え」

《荻堂さんが先でいいよ》

「じゃあ、間をとって五十嵐、言え」

「えーとな、奴ら……」

五十嵐は、マリーと呼ばれたB - 29が、散っていった方角を見た。

「……月に、行こうとしたんやないか？」

「……俺もそう思った」

《……うん、そうだね。ねえ、2人は……》

小夜は少し躊躇いながらも、言う。

《平和な時代って、来ると思う？　アメリカとも仲良くなれるよ  
うな時代が、来ると思う？　》

「……どうなんやらね、荻堂？」

「……俺は、来ると信じたいね」

荻堂はそう答えた。

「兵器として生まれた小夜でさえ、平和を願っているんだ。人間が信じなくて、どうするんだよ」

「……そやね、信じましょ」

五十嵐も、子供のような笑みを浮かべて言う。

《……ありがとう》

小夜はポツリと言った。

「……さよなら三角、また来て四角……」

「四角は豆腐、豆腐は白い」

荻堂が歌い出し、五十嵐が続ける。

《白いはウサギ、ウサギは跳ねる》

「跳ねるはカエル、カエルは青い」

「青いは柳、柳は揺れる……」

……尊ばれるべきはずの、命……

……それが儚く散りゆく、戦場……

……戦乙女たちは、その悲しき場所で何を思うのか……

……彼女たちの物語は、終わらない……

…

……後編……（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

艦魂物を書きたくて、まずは航空機でやってみました。

艦船に宿る魂でなく、「航空機に宿った艦魂っぽいもの」ということなので、正確には「艦魂」とは違いますね（滝汗）

次回は伊四〇〇潜水艦を書いてみるつもりです。

極上艦魂会の先輩方には及びませんが、頑張ります。

普通の戦闘機短編も書いていきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4136f/>

---

帝都防空禄 月夜の邂逅

2010年10月8日22時29分発行